

日本旧石器学会

ニュースレター 第50号  
NEWS LETTER No. 50

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



## 名古屋大学博物館収蔵のアフリカおよび西アジア旧石器資料

門脇誠二（名古屋大学 博物館）

アフリカと西アジアの旧石器資料が名古屋大学に保管されていることはあまり知られていないと思われる。いずれも名古屋大学による遺跡調査によって収集されたオリジナルの資料である。今後、教育研究などのために広く利用していただけるように、この資料や調査の内容について、ここで紹介する。

### 1. アフリカの石器時代の資料

名古屋大学は半世紀以上にわたって、アフリカ大陸におけるフィールド調査に基づく様々な研究を行ってきた。その1つに、アフリカ東部（ケニア、タンザニア、ウガンダ）の石器時代の遺跡調査がある。この調査は、1968年に理学部教員を主体とする「名古屋大学アフリカ大地溝帯学術調査団」の一環として開始されたが、1975年から「名古屋大学東アフリカ考古学調査隊」として独立した。この考古学調査を主導したのが大参義一氏（当時、名古屋大学文学部考古学研究室助手）であった。

大参義一氏は、名古屋大学文学部史学科卒業で、1963年～1981年に名古屋大学文学部考古学研究室に助手として在籍し、アフリカの考古学調査を開始した（その後は信州大学教授、そして愛知学院大学教授）。このアフリカ調査は1989年まで合計9回にわたって実施された。この一連の調査については報告書として英語で出版されており、その概要も邦文で出版されている（それらの文献は門脇2014、2018にまとめられている）。

この東アフリカ調査ではケニアのMtongwe遺跡（前期～中期石器時代）やウガンダのMweya North遺跡（前期石器時代）などの発掘のほか、各地の遺跡踏査が行われた。名古屋大学に保管されている石器資料には、遺跡踏査で表面採取された資料が含まれる（これまで280点ほどを確認した）。その中で、前期石器時代の石器として、ハンドアックスやクリーヴァーが55点ほど（図1）、多面体石器や球

状石器は9点ほどある。石器に”M”と注記されたものはタンザニアのMgonga遺跡で採取されたと考えられる。その他のほとんどは、同じくタンザニアのIsimila遺跡から採取されたとと思われる。

中期石器時代の石器資料としては、ケニアのMtongwe遺跡の表面採集品が42点ある（図2）。この遺跡は大参氏によるアフリカ遺跡調査の中で最も重点的に発掘が行われた。その結果、ルヴァロワ方式の石器技術から幾何学形細石器技術へ次第に変化する過程が、石器群の層的变化として検出された。この記録が、ホモ・サピエンスの人口動態や出アフリカの研究に関わる意義については以前に解説



図1 クリーヴァー（名古屋大学博物館蔵、大参義一アフリカ考古資料、資料番号Lg02-2）



図2 ケニア、Mtongwe遺跡採集の石器。頁岩製の石核、ルヴァロワ剥片、剥片、石刃。右上は化石（名古屋大学博物館蔵、大参義一アフリカ考古資料、資料番号Lg04-13）

した(門脇 2014)。名古屋大学収蔵のMtongwe資料には残念ながら幾何学形細石器は含まれていないが、その素材となったと考えられる小石刃がいくつか含まれる。また、ルヴァロワ剥片やルヴァロワ石核がある。

その他の中期石器時代の資料としては、Prospect Farm遺跡の採集品が7点ある。全て黒曜石製で、小型の両面加工尖頭器、ルヴァロワ剥片、スクレーパーなどがある。後期石器時代の特徴的な石器として、Crescent Island遺跡で採集された幾何学形細石器と小型スクレーパーがある。どれも石英製である。

以上の石器資料の写真は、名古屋大学博物館ウェブの収蔵資料ページで公開されている (<http://www.num.nagoya-u.ac.jp/data/num-l.html>)。その他、名古屋大学博物館には、アフリカ考古学調査で

撮影されたカラー写真スライド約8,000枚も収蔵されており、上記の石器資料が採集された遺跡の写真も含まれている(門脇2018)。

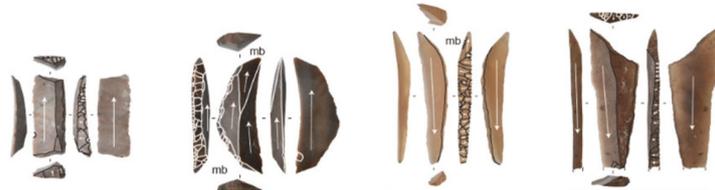
## 2. 西アジアの旧石器時代の資料

筆者は、西アジアのヨルダン国において旧石器時代の遺跡調査を2016年から行っている。この調査で収集された石器などを、ヨルダン考古局の許可の下に借用し、名古屋大学博物館で保管している。

ヨルダン国が位置するレヴァント地方(地中海東岸域)は、ホモ・サピエンスがアフリカからユーラシアへ拡散した起点となった地域であると同時に、ネアンデルタール人分布域の南限でもあった。筆者は、レヴァント地方においてネアンデルタール人とホモ・サピエンスが共存したと考えられる時期から、その後ネアンデルタール人が消滅し、ホモ・サ

### 続旧石器中期

Tor Hamar B-E1層



### 続旧石器前期

Tor Hamar E2層



### 上部旧石器前期

Tor Hamar F-H層



### 上部旧石器初期

Wadi Aghar

Tor Fawaz



### 中部旧石器後期

Tor Faraj, Tor Sabiha



図3 ヨルダン南部の旧石器遺跡群から発掘された石器。7万年前～1.5万年前のあいだの5時期の石器群が名古屋大学博物館に保管されている。

ピエンスが人口を増加させた時期の遺跡の幾つかを、ヨルダン南部のカルハ山域やジュダイド盆地において発掘調査した。

2016年からの調査で収集された考古資料は、43,000点以上の石器を中心とするもので、主に5時期に分けられる(図3)。古い順に、中部旧石器後期(Late Middle Paleolithic, 約7万~5万年前)、上部旧石器初期(Initial Upper Paleolithic, 4.5万~3.6万年前)、上部旧石器前期(Early Upper Paleolithic, 約4万~3万年前)、続旧石器時代前期(Early Epipaleolithic, 2.4万~1.8万年前)、続旧石器時代中期(Middle Epipaleolithic, 約1.5万年前)である(西アジア旧石器研究の最近の動向については門脇2021, 2022を参照)。

ネアンデルタール人とホモ・サピエンスが共存したかもしれない中部旧石器後期の石器資料は、Tor Faraj遺跡とTor Sabiha遺跡の発掘によって採集されたものである。両遺跡の石器技術は、共にルヴァロワ方式による剥片剥離を主体とし、二次加工の頻度や度合いは低い。

次の上部旧石器初期には、ネアンデルタール人が消滅した。その時期の石器群はWadi Aghar遺跡とTor Fawaz遺跡の発掘によって収集された。比較的厚く打面が大きい石刃を素材とするエンドスクレーパーやビュランなど上部旧石器的な器種が特徴である。ルヴァロワ尖頭器に似る石器も含まれるが、石核の形態や剥離方式はルヴァロワと区別される(Kadowaki et al. 2019, 2022a)。

次の上部旧石器前期は遺跡数が増加した。その石器群は、Tor Hamar遺跡のH, G, F層から採取された。丁寧な頭部調整を伴う打面の小さな小型の石刃(小石刃)の増加が特徴である。いわゆる小石刃技術の発達が明確な石器群であり、レヴァント地方ではアハマリアンと呼ばれる石器製作伝統に属する(Kadowaki et al. 2021)。

続旧石器時代前期と中期は、最終氷期最盛期とその後に相当する。この時期の石器群は、Tor Hamar遺跡のE2層とB-E1層からそれぞれ収集された(Naito et al. 2022)。続旧石器時代の指標となる細石器が多く含まれる。前期はカルハンとよばれる石器製作伝統で、中期はムシャビアンに属する。

上記の発掘資料以外に、遺跡近郊の石材産地(フリントの露頭)から採取された石材サンプルや、露頭に散布していた旧石器資料も名古屋大学に保管されている(Kadowaki et al. 2022b; Suga et al. 2022)。中部旧石器のルヴァロワ製品が多いが、上部旧石器の小石刃石核や下部旧石器のピックもあ

る。

石器以外では、海産貝殻の資料が200点ほどある(図4)。調査地は紅海から55km, 地中海から185km離れているので、それらは遠隔物資の搬入を意味する。さらに、ほとんどの貝殻は小型で約半数に穴が開けられていることから、ビーズなどの装身具と考えられる。この内150点以上は続旧石器時代中期のものであるが、上部旧石器前期の文化層から出土した海産貝殻が10点ほど、上部旧石器初期のものが5点ほどある。興味深いことに、中部旧石器後期の遺跡からは1点も見つかっていない。資源獲得範囲の拡大や社会ネットワークの発達、上部旧石器初期から徐々に進行した可能性が考えられる(Kadowaki et al. 2019)。

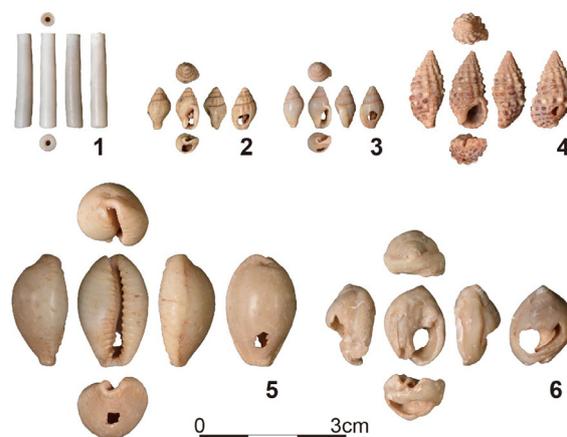


図4 ヨルダン南部の続旧石器前期と中期の貝殻ビーズ(名古屋大学博物館蔵)。

また、Tor Hamar遺跡の続旧石器時代の文化層から採集された動物遺存体(骨や歯)がある。少なくとも属レベルの同定ができた標本が450点弱あり、その多くはガゼル、次いでヤギ類である(Hirose et al. 2022)。

以上の旧石器資料は研究だけでなく、大学院や学部教育、博物館展示にも活用している。本稿での資料紹介を通して、今後、研究や教育等にさらに広く利用されることが望まれる。

#### 引用文献

- 門脇誠二 2014『ホモ・サピエンスの起源とアフリカの石器時代：ムトングウェ遺跡の再評価』, 70頁, 名古屋大学博物館
- 門脇誠二 2018「名古屋大学によるアフリカ考古遺跡の調査記録：大参義一教授の写真スライド資料」『名古屋大学博物館報告』33: 1-14
- 門脇誠二 2021「レヴァント地方における旧石器時代の人類の技術と行動の通時変化 - 最近の動

向と考察－（前編）」『西アジア考古学』22：125-142

門脇誠二 2022 「レヴァント地方における旧石器時代の人類の技術と行動の通時変化－最近の動向と考察－（後編）」『西アジア考古学』23

Kadowaki, S. et al. 2019 Lithic technology, chronology, and marine shells from Wadi Aghar, southern Jordan, and Initial Upper Paleolithic behaviors in the southern inland Levant. *Journal of Human Evolution* 135: 102646.

Kadowaki, S. et al. 2021 Frequency and production technology of bladelets in Late Middle Paleolithic, Initial Upper Paleolithic, and Early Upper Paleolithic (Ahmarian) assemblages in Jebel Qalkha, Southern Jordan. *Quaternary International* 596: 4-21.

Kadowaki, S. et al. 2022a Lithic technology and chronology of Initial Upper Paleolithic assemblages at Tor Fawaz, southern Jordan. *Journal of Paleolithic Archaeology* 5: 1.

Kadowaki, S. et al. 2022b Survey for chert outcrops in the western Hisma Basin, southern Jordan and its implications for Paleolithic raw material procurement. *Orient* 57: 3-20.

Hirose, M. et al. 2022 Epipaleolithic hunting in an arid area of the Levant: faunal remains from Tor Hamar, southern Jordan. *Orient* 57: 21-42.

Naito, Y. et al. 2022 Paleoenvironment and human hunting activity during MIS 2 in southern Jordan: Isotope records of prey remains and paleosols. *Quaternary Science Reviews* 282: 107432.

Suga, E. et al. 2022 Investigating changes in lithic raw material use from the Middle Paleolithic to the Upper Paleolithic in Jebel Qalkha, southern Jordan. *Archaeological Research in Asia* 29: 100347.

## 2022年度 日本旧石器学会第20回 総会・研究発表・シンポジウムについて

2022年6月4日（土）・5日（日）に名古屋大学（東山キャンパス）において、下記のとおり、日本旧石器学会第20回総会・研究発表・シンポジウムを開催します。

5日（日）に開催するシンポジウムのテーマは、「更新世末の西南日本における環境変動と人類活動」です。細石刃石器群から縄文草創期にかけての

西南日本において、自然環境がどのように変遷し、それに対応して人類文化がどのように変容していたのかに関し、各発表者よりご報告いただきます。続くパネルディスカッションでは、地域間の比較と今後の展望を議論する予定です。一般研究発表・ポスターセッションの発表者・題目については、学会ホームページでご案内いたします。

なお、新型コロナウイルスの感染状況に応じ、オンラインでの開催に切り替わる可能性があります。その際には下記、総会・一般研究発表・シンポジウム・ポスターセッションの発表時間等については、一部変更になる場合があります。今後の変更等については、一般研究発表・シンポジウム・ポスターセッションの内容も含め、適時、学会ホームページでお知らせしますので、ご確認をお願い申し上げます。

2022年6月4日（土）

会場：名古屋大学東山キャンパス

（愛知県名古屋市千種区不老町）

総会・研究発表会場：野依記念学術交流館2階

○総会（13：30～14：30）＊12：30受付開始

○一般研究発表（14：45～17：00）

＊一件20分（質疑込み、休憩15分）

○懇親会 今年度は新型コロナウイルス感染予防の観点から中止します。

2022年6月5日（日）

シンポジウム会場：野依記念学術交流館2階

ポスター会場：野依記念学術交流館1階

○シンポジウム 『更新世末の西南日本における環境変動と人類活動』（9：00～11：45）

＊8：30受付開始

・研究企画委員「趣旨説明」

・高原光「植生環境の変化」

・長井謙治「中部地方（東海西部）」

・光石鳴巳「近畿地方」

・三好元樹「中四国地方」

・芝康次郎「九州地方」

＊いずれも仮題です。一件30分（質疑込み、休憩15分）。

<昼食休憩 11：45～13：30>

○ポスターセッション・コアタイム（12：30～13：30）

\*ポスターは5日の受付後に掲示（4日はポスター掲示できません。）

- パネルディスカッション（13：30～14：30）  
シンポジウム報告者全員，司会（研究企画委員）
- 閉会（14：30～14：45）

会場案内

名古屋大学東山キャンパス  
（愛知県名古屋市千種区不老町）  
地下鉄名城線「名古屋大学駅」2番出口からすぐ  
<https://www.nagoya-u.ac.jp/access/index.html>

宿泊

宿泊の斡旋はいたしませんので，各自でご手配ください。

参加申込

同封のハガキに必要事項をご記入の上，5月20日までに投函ください。また，やむをえず総会を欠席される場合は，同ハガキ下段に記載された委任状にご記入・ご捺印の上，ご返送くださいますようお願い申し上げます。会則第5条により，全会員の5分の1以上の出席（委任状を含む）をもって総会が成立します。

最後に、コロナウイルス感染防止対応のため事前に参加者の概数を把握したいと思います。出欠葉書での返信に加え、下記グーグルフォームURLにアクセス頂き、対面開催する場合の出欠予定について5月10日（火）までにご回答ください。

<https://forms.gle/jRrsXKLdcuqyxXcx6>



日本旧石器学会役員選挙結果  
のお知らせ

2022年3月1日～20日に郵送で行われた次期日本旧石器学会役員選挙の投票に関し，開票作業を4月2日に行いました。集計結果を下記の通り報告します。なお，今回の選挙当選者は本年6月4日開催の総会で承認を受けた後，次期役員となる予定です。

1. 場所：東京都港区内
2. 日時：2022年4月2日 13時00分～15時00分
3. 開票作業

佐藤孝雄（選挙管理委員長），鈴木美保（選挙管理委員），亀田直美（選挙管理委員），渡辺丈彦（総務委員）

4. 得票数

- 1) 郵送投票枚数 107枚
- 2) 郵送有効投票枚数 107枚
- 3) 投票数 1013票
- 4) 有効投票数 1013票

5. 当選者

7地区の上位得票者1名(○印)と，それ以外の得票数上位15名が当選。

氏名	投票数	地域	順位
青木 要祐 あおき ようすけ	36	中部	9
赤井 文人 あかい ふみと	32	北海道	10
出穂 雅実 いづほ まさみ	44	関東	5
上峯 篤史 うえみね あつし	41	中部	6
大竹 憲昭 おおたけ のりあき	60	中部	○
大場 正善 おおば まさよし	37	東北	8
沖野 実 おきの みのる	41	中四国	○
越知 睦和 おち よしかず	38	九州・ 沖縄	○
鹿又 喜隆 かのまた よしたか	52	東北	○
熊谷 亮介 くまがい りょうすけ	26	東北	13
佐藤 宏之 さとう ひろゆき	76	関東	○
沢田 敦 さわだ あつし	53	中部	2
高倉 純 たかくら じゅん	64	北海道	○
高屋敷 飛鳥 たかやしき あすか	47	関東	4
長崎 潤一 ながさき じゅんいち	52	関東	3
中村 雄紀 なかむら ゆうき	29	北海道	12
仲田 大人 なかた ひろと	39	関東	7
野口 淳 のぐち あつし	62	関東	1
間 直一郎 はざま なおいちろう	15	関東	15
平澤 悠 ひらさわ ゆう	24	中四国	14
森先 一貴 もりさき かずき	75	近畿	○
山田 和史 やまだ かずふみ	31	関東	11

以上の当選者の他，得票数が1票～2票の方が35名いました。その合計は39票です。

## 研究グループ活動報告

### 郡家今城遺跡再整理グループ

2021年度の作業は、高槻市からの遺物借用期限が満了したため、遺物を返却したうえで、収蔵先の「高槻市立今城塚古代歴史館」をお借りして実施した。作業の目的はこれまで通り、1) 礫群の実態把握、2) 石器群の個体別資料レベルでの把握、3) 礫・石器の悉皆台帳・分布図の作成であった。礫群の接合は2021年6月をもって終了し、これ以降は石器の接合・個体識別、遺物台帳の完成およびこれに対応する遺物分布図上への遺物番号の記入に集中した。作業の進捗状況は以下の通りである。

1) 礫群の実態 昨年度刊行のニュースレター第47号記載内容とほぼ同様であるので数字の詳細は省略する。礫から石器への分類変更などがあり、最終的な数字の確定までにはなお作業を必要とする。

2) 石器群の個体識別結果 A~H群について、群内及び群間接合作業を実施してきた。その結果、碎片類を除いて、これまで、暫定的に83個体を識別した。各個体は接合資料と非接合資料から成るが、1978年報告書時点の接合例のほかに、新たに36個体の接合例を加えることができた。個体数とこれに属する資料点数をより確実なものにするためには、さらなる作業を必要としている。

3) 礫・石器の悉皆台帳・分布図の作成 悉皆台帳の作成と実測図への遺物番号の記入は基本的に終了した。残すは石器・礫の接合関係図の作成である。この作業が未完であるため、A~Hの大別8群、細別20群間の関係は未整理である。

4) 今後の予定 高槻市側との協議の結果、2022年9月までに報告書の予算見積書を提出する。報告書の刊行は2023年度とすることとなった。

2021年度までの作業結果をまとめるためには、データの確認・点検・記載漏れの補足、現物との照合など、細かな詰め作業が必要のため、市側と協議の結果、2022年9月まで整理事業を延長することとした。(鈴木忠司)

## 関連学会・出版情報

### 「日本列島における石刃石器群の出現」

#### 岩宿フォーラム2021シンポジウム

令和3年11月7日(日)に群馬県岩宿博物館において開催された。シンポジウムでは日本列島における後期旧石器時代の開始について、長野県香坂山遺跡の発掘調査で出土した初期後期旧石器時代

(Initial Upper Paleolithic, 以下, IUP) とされる石刃石器群を中心に、アジア地域での現状を踏まえて議論された。

講演は2部構成で、第1部では関東平野北部における石刃石器群の状況が説明された。国武貞克氏と須藤隆司氏から、香坂山遺跡や群馬県善上遺跡の石刃石器群がIUPの石器群として評価され得る主旨の説明がされた。第2部では東アジア地域を中心に、長井謙治氏、加藤真二氏、仲田大人氏、大谷薫氏(紙面のみ)から各地のIUPの石刃石器群の見解が報告された。

国武氏は、香坂山遺跡の石器群が中央アジア地域の石器組成と共通し、年代は36.8 ka cal BPとなることを示した。一方、静岡県井出丸山遺跡や熊本県石の本遺跡のような38-37 ka cal BPの後期旧石器時代最古期の台形様石器群とは石器組成が共通せず、東京都武蔵台遺跡の例から35.3 ka cal BPには二極構造が成立していることから、日本列島での石器群の二極構造は38-37 ka cal BPの短期間に成立した可能性を指摘した。これらの石器群の出現年代の詳細をより具体的に追究するにあたって、今後は100年単位の高精度での年代値に基づいた議論が必要になると予想される。

また、国武氏は香坂山遺跡の例から、石刃製作技術が小口面型から周縁型に漸進的に進化・発展するという従来の編年観に懐疑的な見解を示した。システム論的進化発展論で石器群の編年を捉える場合、石器群構造が確立した時点で全ての変異は出揃い、各地域の環境に適応する過程で特殊化すると考えることから、地域適応史の観点から編年観の構築をする必要性を示唆する。

香坂山遺跡の石刃石器群は、その年代観や評価については今後とも議論が必要なのは間違いない。しかし、今後の日本での旧石器研究は、アジア大陸からの日本列島へどのように石器群の情報が伝播したかというよりも、東アジアといった大きな地域生態系に対して、人類が各地域でどのように適応したのかという観点から、石器群を評価する姿勢が望まれることが本シンポジウムで示された。(小原俊行)



シンポジウム会場の様子

「九州における石製狩猟具研究の新展開」

第47回九州旧石器文化研究会 宮崎大会開催報告

始良火山噴火以降の九州には、様々な顔付きをした尖頭器石器群が登場する。今大会ではそれらの石器群に加え、縄文時代以降の資料も比較対象とし、計量的属性、使用痕、破損パターンの分析および動物解体実験等を口頭発表のラインナップとした。また、誌上発表には捕鯨用と推定される石器の分析や、着柄痕跡に関わる研究などがあり、予稿集には多彩な内容を収録することができた。

内容全てに関わるものとして、山田しょう氏による基調講演「石製狩猟具の世界的動向—形態計測分析と「指標的衝撃剥離」を中心として—」が位置づけられる。Hughes氏やShea氏らによって導入されたTCSA・TCSP値分析、佐野勝宏氏らによって列島資料の分析も進展するDIF分析をはじめ、方法論の成立過程や利点、そして課題が的確に叙述されている。濃密なその内容は一読をお薦めするが、ここでは印象的だった角錐状石器の形態について言及しておく。

複数の機能・用途を担った石器が混在するこの範疇には、分厚い断面を持つ刺突形態も含まれる。貫通力と耐久性とを相殺関係にあるとする投射武器の性能評価 (Hughes) に基づけば、この種の石器には耐久性を重視した突き槍の可能性も想定される。いっぽう多数の資料を対象とした馬籠亮道氏の分析では、他の石器と比較して、角錐状石器におけるDIFの出現率の低さが強調された。これが道具としての使い方を反映するのか、あるいは分析手法の問題なのかは、にわかに断定が難しい。そもそもこうした形態の石製狩猟具は、世界的にも類例が少ない。ナイフ形石器や剥片尖頭器、縄文時代以降の石鏃について、世界各地によく似た石器が分布する事実とは対照的である。一筋縄ではゆきそうもない角錐状石器の実態解明は今後も追究に値する課題といえる。TCSA値などの計量的属性やDIF分析について、九州の石器群向けにカスタマイズし、有効性を高める方向性も考えられよう。

COVID-19感染予防の観点から、今大会もどのような開催方式をとるのか、直前まで気を揉んだ。最終的には2021年11月13・14日の両日、対面・オンライン併用で開催することができた。

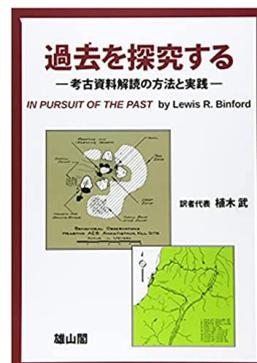
なお大会の予稿集を収録した『九州旧石器』第25号を入手御希望の方は、下記アドレスまでお問い合わせ頂きたい。

palaeolithickyushu2018@gmail.com

(松本 茂)

新刊紹介

ルイス・R・ビンフォード  
『過去を探究する—考古資料  
—料解読の方法と実践—』  
植木 武・小杉 康・鶴田  
典昭・内山敏行・高倉  
純・小杉生奈子 (訳)  
雄山閣 2021年6月刊  
297頁 B5版 定価 (本  
体8,000円+税)



(原書はLewis R. Binford (1983) IN PURSUIT OF THE PAST: Decoding the Archaeological record. University of California Press.)

ルイス・R・ビンフォードは著名な人類学者・考古学者であり、今日の先史考古学の理論的基盤構築に多大な貢献をなしたことで知られる。本書は1983年に刊行された原書にもとづき、ピーター・ベルウッド著『太平洋』の訳出でも知られる植木武氏らの手でまとめられた翻訳である。

原書は、1980-81年にビンフォードがヨーロッパで行った講演内容を書き起こしたもので、難解な彼の著作の中であって、その論旨が要領よくコンパクトにまとめられた一冊である。原書については、すでに阿子島香 (1985) 「ルイス・R・ビンフォード『過去への追跡』」『考古学研究』31(4)をはじめ詳しい解説があり、巻末にも植木氏による学史的回顧を含めた61頁に及ぶ「訳者あとがき」が掲載されており大変有益である。

静的な考古資料から、動的な過去をいかに語りうるかという著者ならではの問いと、推論法 (methods for Inference) へのアプローチがちりばめられており、先史考古学を志す面々には必読の一冊であろう。翻訳大国の日本でも、ビンフォードの著書を和文で読める機会はほとんどなかったが、刊行から30余年を経ての本書の刊行はまことに喜ばしいことであり、訳者らの取られた労に感謝申し上げたい。

「訳者あとがき」でも言及されているが、ビンフォードは大戦後の一時期、沖縄に滞在していた経歴がある。軍隊に入隊した彼は、紆余曲折を経て日本語の訓練を受けた後、1952-53年まで沖縄に配属された (その後、1954年にも滞在していたようである)。

1951年9月に調印、翌年4月28日に発効したサンフランシスコ講和条約によって日本の主権は回復さ

れたが、北緯29度線以南の南西諸島と小笠原諸島は引き続き米軍統治下に置かれた。その後、奄美群島は1953年12月25日、小笠原諸島は1968年6月26日に日本に復帰した一方、沖縄の復帰はようやく1972年5月15日に果たされた。

今年（2022年）は沖縄の日本復帰から50年の節目にあたる。当時の沖縄は朝鮮戦争の前線基地であり、戦後復興と並行して米軍による土地収用をはじめとする高圧的な政策が進められ、地元住民との軋轢が噴出していった。一方、離島ではまるで「新石器時代」のような伝統的なくらしも維持されており、彼はそうした異文化体験に強くインスパイアされたようだ。

なお、訳書では一部の図版類が著作権の関係からか割愛されているため、合わせて原書も手に取っていただきたいところである。個人的な話で恐縮だが、白保竿根田原洞穴遺跡（石垣島）近隣の風景写真（図126）が掲載（訳書では割愛）されていたのには驚いた。ビンフォードは、沖縄・奄美の各地で化石産地や貝塚、墓地等を対象とした考古学的活動も行っていたようで、彼の考古学関係記事の嚆矢は、米軍の星条旗新聞（Stars and Stripes）に掲載された沖縄の貝塚調査の記事であるという。

沖縄県立博物館・美術館にも、ビンフォードの寄贈資料や写真が残されており、今後詳しい調査を計画したいと考えている。（山崎真治）

## お知らせ

### メーリングリストの運用について

日本旧石器学会ではメーリングリストの運用を行っています。これは学会からの連絡手段として利用するとともに、情報交換の場として活用していくために設けたものですが、これまでその登録についてはあくまで任意のお願いというものでした。

一方、新型コロナウイルス感染拡大にともない、各種学会行事の変更などがこれまで以上に増加することが予想され、学会と会員、そして会員間でのより迅速な情報共有が喫緊の課題となっています。その解決のためには、メーリングリストの更なる有効活用と登録率の向上が必要であることから、このたび役員会での議論と了承のもと、メーリングリストへの登録を原則として義務化することにいたしました。ご理解を賜れば幸いです。

まだメーリングリストへの登録のお済みでない方

は、携帯電話のメールアドレスでも構いませんので、事務局のメールアドレス（jimu@palaeolithic.jp）までお知らせください。

### 会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されていますので、会費は原則前納制としております。ニュースレター同封の払込取扱票を用いて、今年度分会費の納入をお願いします。振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。全国の郵便局で簡単に手続きいただけます。これまでもお知らせしておりますとおり、2018年度より年会費が6,000円になりました。御理解のほどよろしくをお願いします。

また、会費滞納は本会運営に大きな支障を招く原因になりますので、同封の会費納入状況を御確認のうえ、2021年度以前の会費を未納の方は、未納分もあわせて納入をお願いいたします。

転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても、本会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等で御連絡ください。

### 日本旧石器学会入会申込み手続きについて

日本旧石器学会入会申込みにつきましては、入会申込書を日本旧石器学会ホームページからダウンロード（<http://palaeolithic.jp/join.htm>）し、必要事項を記載の上、日本旧石器学会事務局へ郵送してください。入会資格審査にあたっては論文等著作物の提出を求める場合があります。ご協力ください。

日本旧石器学会ニュースレター 第50号

2022年4月28日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会  
山崎真治・赤井文人・山田和史

発行：日本旧石器学会

事務局：〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

慶應義塾大学文学部 渡辺丈彦研究室気付

E-mail：jimu@palaeolithic.jp

HP：http://palaeolithic.jp/index.htm